

高等学 校

平成23年度

教育研究員研究報告書

家 庭

東京都教育委員会

目 次

- I 研究主題設定の理由 1
- II 研究の視点 1
- III 研究の仮説 2
- IV 研究の方法 3
- V 研究の内容 4
- VI 研究の成果 2 4
- VII 今後の課題 2 4

研究主題	「生活を主体的に創造し共に生きる力を育むために、一人一人の役割と責任を自覚させ課題解決能力を高める家庭科教育について」
------	---

I 研究主題設定の理由

新学習指導要領において、21世紀は「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような知識基盤社会は、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。知識基盤社会は、変化への対応や新しい未知への課題にも試行錯誤しながら対応することが求められており、生徒が地域社会の一員として、身近な地域社会の課題解決に向けて主体的に行動し、より良い地域社会の発展を目指し、貢献しようとする意識や態度を育むことは重要なことである。新学習指導要領における家庭科の教育目標は「人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して主体的に家庭や地域生活を創造する能力と実践的な態度を育てる。」とし、生活に必要な知識と技術の習得を通して、共に支え合う社会の一員として主体的に行動する意志決定能力を身に付け、男女が協力して家庭や地域の生活を創造することができるようにすることを重視している。

授業を通して生徒の実態を見てみると、核家族化が進み、人や社会と主体的に関わりをもとうとする意識の低下から人と人との関わりも希薄になっており、例えば、調理実習で問題が生じた場合、班員同士で力を合わせて解決する能力や態度を身に付けてほしいが、安易に教員に聞いてすぐに解決しようとする傾向が強くある。これまで実験や実習を行う際は、グループ学習を基本として授業を展開してきたが、こうした生徒の実態から、グループ学習の中に協同学習の手法を取り入れることで、コミュニケーション能力を高め、他者と自己との関わりの中で自ら学んでいく姿勢を身に付け、意思決定能力や課題解決能力を高めることができると考えた。そこで、「生活を主体的に創造し共に生きる力を育むために、一人一人の役割と責任を自覚させ課題解決能力を高める家庭科教育について」を研究主題として授業実践に取り組むこととした。

II 研究の視点

本年度の高校部会全体のテーマは「思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業等についての実践研究」である。

家庭科における「思考力」とは、自立への基礎・基本的な知識・技術を習得・活用し、家庭や地域の生活を主体的に創造しようと構想する力、「判断力」とは、家庭や地域における生活上の課題を見だし、課題解決に向けて必要な情報を選択しながら計画的に実践し解決する力、「表現力」とは、様々な人々と関わり、コミュニケーション能力を向上させる中で、学習で獲得した知識・技術を家庭や地域、学校の生活の場に生かすことができる力と捉えた。

このことを踏まえながら本研究では、協同学習の手法を取り入れた授業の実践に取り組んだ。協同学習では、生徒一人一人が積極的に学習活動に参加することで学習効果が高まり、生徒同士が教え合うことで、学習意欲を高め、仲間とともに学ぶ楽しさを体験しながら、思考力や表

現力、コミュニケーション力等が高められるといわれている。

家庭部会では、従来のグループ学習の中に協同学習を取り入れることとし、その際に以下の五つの要素を盛り込み、協同学習として学習効果が得られるようにした。

(1) 互いに協力する関係を作る（協力する。）。)

生徒一人一人が学習活動に参加することが、協同学習のポイントとなる。提示された課題等に対して、生徒自身が学習することと、グループの仲間全員が確実に課題等に取り組み、学習することが重要となる。生徒には、個人の学習活動が重要であり、課題に対してきちんと取り組まなければグループ内の学習活動にも影響を与えることを実感させ、互いに協力しながら学習していることを認識させる。

(2) 互いに関わり、学習を高め合う関係を作る（互いに関わる。）。)

グループ内の仲間が学習を進める中で、困っていたらアドバイスをしたりするなどして支援したり、励ましたり、仲間の取組に対してほめたりするなど、互いに仲間に関心をもち、互いの意見や考えを共有し合い、学習を高め合う関係を作っていくようにする。

(3) 個人の責任を自覚させる（個人の責任。）。)

一人一人の生徒がやるべきことをしっかりやることが、互いの学習効果を高めることとなり、仲間から学習内容に対する新たな気付きや発見を得ることにもなる。グループ内のそれぞれのメンバーがやるべきことを果たさなければよい結果が得られないことを自覚させる。

(4) スモールグループで学習活動を行う（スモールグループでの学習活動。）。)

小・中学校では、学級活動（HRや清掃）や学校行事・授業を通して小集団での活動がよく行われてきている。高校においても様々な生徒の実態を踏まえ、小集団で学習活動に取り組み、学習に対する理解を深めることは重要である。

(5) グループの学習活動を充実させる（学習活動の充実。）。)

個人の学習からグループの学習へ展開するためには、グループで話し合い、意見や考えをまとめる時間が必要となる。話し合いの中で、お互いの意見や考えを基に、さらにより良いものへとするためには、お互いの意見や考えを引き出すための話し合いが欠かせない。話し合うことで個々の生徒の発言を引き出し、課題に対して取り組んだ達成感や学習した充実感を味わわせることにもつながると考える。

上記(1)から(5)の要素については、それぞれの実践事例の本時の展開において、【協①】（協力する）、【協②】（互いに関わる）、【協③】（個人の責任）、【協④】（スモールグループでの学習活動）、【協⑤】（学習活動の充実）と記載し、授業のどの場面で活用したかについて示した。

Ⅲ. 研究の仮説

生徒の現状を振り返ってみると、核家族化が進み、人や社会との関わりが低下する中、日常生活における実践的・体験的経験が乏しく、情報機器が低年齢から普及していることなどから、人や社会と主体的に関わろうとする意識が低下している。これにより、失敗や他者との違いを嫌い、自己肯定感がもてず、主体的に創造する力に欠けている者が多い。

このような生徒の現状を改善するためには、家庭や地域との関わりの中で課題を見だし、考えることを楽しみ、解決させる力を育成する授業や、生徒相互が認め合い協力して、自己を

表現する機会を多く取り入れた授業を展開することが必要であると捉え、次の学習活動を実践することが有効な手だてであると考えた。

- ① 授業の中で、小・中学校における学習内容を振り返る場面を設けることで、学習が深まり、生活の自立に必要な知識・技術が定着し、実生活において活用しようとする力が身に付く。
- ② 協同学習の手法を用いて、一人一人が深く考え、他者と情報を共有することによって意思決定能力が高まり、自ら生活の課題を主体的に解決して実践しようとする力が身に付く。

IV 研究の方法

今年度の研究では、小・中学校の学習内容を振り返り、研究の視点で示した協同学習の手法を授業の中に取り入れることで、生徒がどのように考えを深め、自己の生活における課題について認識し改善しようとするのか、発表やワークシートの記述等、従前の授業からの生徒の変容などから協同学習の効果について検証した。

- 1 食生活分野では、「糖度実験」を通して、栄養、食品などについて科学的に理解させ、食生活に関わる情報を適切に判断し、食生活を主体的に営むことができるための授業実践を行った。①個人と集団の責任を考えさせ、役割分担を決めて実験に取り組む。②結果をグループで討論し、考察させる。③次の授業につなげる課題を提示する。④次の授業の導入で必ず前時の振り返りを行う。⑤グループは今後継続して学習に取り組む班として構成する。以上五つの視点を取り入れて検証を行った。
- 2 保育分野では、遊びは子供の生活の大部分を占めていることを認識させ、遊びの意義や児童文化財による子供への影響を考えさせる授業実践を行った。その際、大人が果たす役割と保育の重要性や社会の果たす役割について認識させ、中学校までの既習内容との関連を図り、大人として、子供を育てる側の視点での保育について考えを深めさせた。具体的には①自分なりに遊びを考え、遊びの意義と働きについて考える。②遊びについて班全員で意見を交換する。③班の意見をまとめ発表する。④他の班の発表を評価する。⑤班全員で自分の班の発表内容を振り返る。以上五つの視点を取り入れて検証を行った。
- 3 衣生活分野では、「繊維の燃焼実験」を通して、被服材料について科学的に理解させ、安全や環境に配慮した衣生活を考えさせた。また、各ライフステージにおける衣生活の特徴や課題について関連付け、快適な衣生活を営む能力を高めるための授業実践を行った。具体的には、①実験の作業を役割分担して取り組む（主体的な行動力）。②班全員で考察する（学習を深める）。③授業時間毎にグループ全員で学習内容を振り返る（学習の定着）。以上、三つの視点を取り入れて検証を行った。
- 4 住生活分野では、東日本大震災の体験を基に、「高校生として取るべき行動」を考えさせた。具体的には①グループは調理実習の班で行う。②事前に東日本大震災以降の我が家の防災対策について調べる課題を提示する。③東日本大震災発生時の自分の行動について振り返る。④地震発生時の場面を想定し、自分（高校生）、家族、高齢者、地域の人、子供たちなど、他者とどう自分（高校生）が関わっていくのか、グループで役割分担をしながら話し合い、発表する。以上四つの視点を取り入れて検証を行った。

V 研究の内容

1 研究構想

全体テーマ **新学習指導要領に対応した授業の在り方について**

高校部会テーマ **思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業等についての実践研究**

教科等における「思考力・判断力・表現力」の定義

思考力 自立への基礎・基本的な知識・技術を習得・活用し、家庭生活や地域生活を主体的に創造しようと構想する力

判断力 家庭生活や地域社会の生活上の課題を見だし、課題解決に向けて必要な情報を選択しながら計画的に実践し解決する力

表現力 様々な人々と関わりコミュニケーション能力を向上させる中で、学習で獲得した知識・技術を家庭や地域、学校の生活の場に生かすことができる力

各教科における「思考力・判断力・表現力」の育成の現状と課題

現状 核家族化が進み、家庭や地域との関わりが低下する中、日常生活における実践的、体験的経験が乏しく、情報機器の低年齢からの普及などから、人や社会と主体的に関わろうとする意識が低下している。これにより、失敗や他者との違いを嫌い、他者との接触を避ける傾向が見られる。また、自己肯定感が低く、主体的に創造する力に欠けている。

課題 家庭や地域との関わりの中で課題を見だし、考えることを楽しみ、解決させる力を育成する授業、生徒相互が認め合い協力して、自己を表現する機会を多く取り入れた授業を展開する必要がある。

家庭部会主題

生活を主体的に創造し共に生きる力を育むために、一人一人の役割と責任を自覚させ課題解決能力を高める家庭科教育について

仮説

- ・家庭科の学習内容を振り返ることで、生活の自立に必要な知識・技術が定着し、実生活に活用しようとする。
- ・協同学習の手法を用いて、一人一人の生徒が深く考え他者と情報を共有することによって、意思決定能力が高まり、自ら課題を解決して実践しようとする。

具体的方策

- ・発達段階ごとの学習を振り返り、自己の考えを深め、他者との違いを理解し、自分の思いを他者に伝えさせる。(思考力・表現力)
- ・協同学習を取り入れ、一人一人に役割を与え責任をもたせて学習活動を行い、相手を理解するとともに自己肯定感を高めさせる。(判断力・表現力)
- ・学習した知識や技術の習得を深め、課題に対して解決策を考え、判断・表現させる。(判断力・表現力)

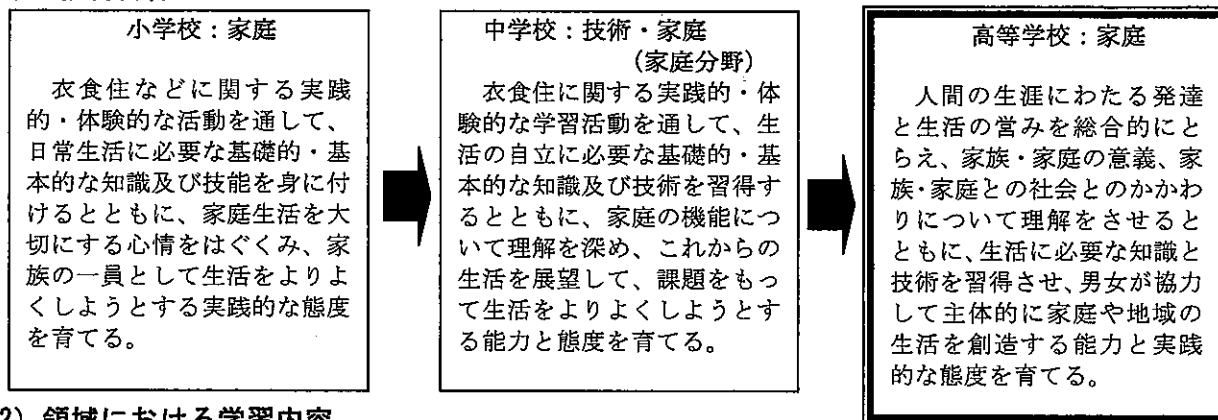
検証方法

- ・提示した課題に対して、知識や技術を活用し、課題解決に向けて自ら考え意思決定をしているか、課題解決のために具体的な方策について表現することができるか、評価する。
- ・自ら課題を見だしその改善に向けて取り組み実践しているか、発表やレポート、提出物、自己評価及び相互評価の内容から評価する。

2 新学習指導要領における学習内容の体系化

高等学校家庭科では、自己及び家族の発達と生活の営みに必要な知識と技術を、小学校家庭科、中学校技術・家庭科の上に積み重ねて習得させ、生活をよりよくするために主体的に実践できる能力と態度を育成することを目指している。そこで、限られた授業時間を有効活用するために、義務教育段階における学習内容を踏まえた上で意思決定能力や課題解決能力を高めるよう授業実践を行うこととした。以下に、義務教育段階と高等学校における学習内容についてまとめた（紙面の関係で高等学校家庭科については、「家庭基礎」のみとした。）。

(1) 教科目標



(2) 領域における学習内容

ア 家族・家庭

	具体的な学習内容	習得させる知識・技術
小学校 (A 家庭生活と家族)	(1) 自分の成長と家族 ア 自分の成長を自覚することを通して、家庭生活と家族の大切さに気付くこと。 (2) 家庭生活と仕事 ア 家庭には自分や家族の生活を支える仕事があることが分かり、自分の分担する仕事ができること。 イ 生活時間の有効な使い方を工夫し、家族に協力すること。 (3) 家族や近隣の人々とのかかわり ア 家族との触れ合いや団らんを楽しく工夫すること。 イ 近隣の人々とのかかわりを考え、自分の家庭生活を工夫すること。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の成長と家族の支え ・家庭生活を支える仕事 ・自分や家族の生活時間 ・地域のルール、マナー ・近隣住民とのコミュニケーション
中学校 (A 家庭生活と家族)	(1) 自分の成長と家族 ア 自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて考えること。 (2) 家族と家族関係 ア 家庭や家族の基本的な機能と、家庭生活と地域とかかわりについて理解すること。 イ これからの自分と家族とのかかわりに関心をもち、家族関係をよりよくする方法を考えること。 (3) 幼児の生活と家族 ア 幼児の発達と生活の特徴を知り、子どもが育つ環境としての家族の役割について理解すること。 イ 幼児の観察や遊び道具の製作などの活動を通して、幼児の遊びの意義について理解すること。 ウ 幼児と触れ合うなどの活動を通して、幼児への関心を深め、かかわり方を工夫できること。 エ 家族又は幼児の生活に関心をもち、課題をもって家族関係又は幼児の生活について工夫し、計画を立てて実践できること。	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の自立 ・家族と共に家庭生活を工夫 ・家族、家庭の機能 ・幼児の心身の発達と生活の特徴 ・基本的生活習慣 ・幼児の遊びの意義 ・幼児への関心

	具体的な学習内容	習得させる知識・技術
高等学校 (家庭基礎)	(1) 人の一生と家族・家庭及び福祉 ア 青年期の自立と家族・家庭 イ 子どもの発達と保育 ウ 高齢期の生活 エ 共生社会と福祉	<ul style="list-style-type: none"> ・青年期の課題 ・男女の協力 ・家庭、地域の生活創造 ・自己の意思決定と責任ある行動 ・乳幼児の心身の発達と生活 ・親の役割と保育 ・子供の育つ環境 ・親や家族、地域、社会の役割 ・高齢期の特徴と生活 ・高齢社会の現状と課題 ・高齢者の自立を支える地域、社会の役割 ・福祉、社会的支援の理解 ・社会の一員としての自覚

イ 食物

	具体的な学習内容	習得させる知識・技術
小学校 (B 日常の食事と調理の基礎)	(1) 食事の役割 ア 食事の役割を知り、日常の食事の大切さに気付くこと。 イ 楽しく食事をするための工夫をすること。 (2) 栄養を考えた食事 ア 体に必要な栄養素の種類と働きについて知ること。 イ 食品の栄養的な特徴を知り、食品を組み合わせてとる必要があることが分かること。 ウ 1食分の献立を考えること。 (3) 調理の基礎 ア 調理に関心を持ち、必要な材料の分量や手順を考えて、調理計画を立てること。 イ 材料の洗い方、切り方、味の付け方、盛り付け、配膳及び後片付けが適切にできること。 ウ ゆでたり、いためたりして調理ができること。 エ 米飯及びみそ汁の調理ができること。 オ 調理に必要な用具や安全で衛生的な取り扱い及びコンロの安全な取り扱いができること。	<ul style="list-style-type: none"> ・食事の大切さ、マナー ・五大栄養素 ・ゆでる、炒める等の加熱調理 ・伝統的な日常食 ・食器、刃物の扱いと衛生的な取り扱い ・換気、やけどの防止 ・後片付け ・食育の充実に資するよう配慮 ・生の魚や肉は扱わず、米、野菜、芋類、卵を適切な食品として扱い、安全と衛生に留意
中学校 (B 日常の食事と調理の基礎)	(1) 中学生の食生活と栄養 ア 自分の食生活に関心を持ち、生活の中で食事が果たす役割を理解し、健康によい食習慣について考えること。 イ 栄養素の種類と働きを知り、中学生に必要な栄養の特徴について考えること。 (2) 日常食の献立と食品の選び方 ア 食品の栄養的特質や中学生の1日に必要な食品の種類と概量について知ること。 イ 中学生の1日の献立を考えること。 ウ 食品の品質を見分け、用途に応じて選択できること。 (3) 日常食の調理と地域の食文化 ア 基礎的な日常食の調理ができること。また、安全と衛生に留意し、食品や調理用具等の適切な管理ができること。 イ 地域の食材を生かすなどの調理を通して、地域の食文化について理解すること。 ウ 食生活に関心を持ち、課題をもって日常食又は地域の食材を生かした調理などの活動について工夫し、計画を立てて実践できること。	<ul style="list-style-type: none"> ・食事が果たす役割と健康に良い食習慣 ・五大栄養素＋水＋食物繊維 ・中学生の1日に必要な食品の種類と概量 ・食材の原産地、原料、期限表示、保存方法などの表示の見方 ・煮る、焼く、炒めるなどの加熱調理と直火、オーブンなどの間接加熱 ・魚や肉など生の食品に関する食中毒予防のための安全で衛生的な食品の扱い方 ・布巾やまな板の衛生的な取り扱い ・刃物の安全な取り扱い ・電気及びガス調理器具 ・調理の後始末 ・ゴミの処理 ・実際に食材に触れ、地域又は季節の食材、食文化の理解
高等学校 (家庭基礎)	ア 食事と健康 (ア) 栄養と食事 (イ) 食品と調理	<ul style="list-style-type: none"> ・青年期と家族の各ライフステージの栄養的特徴 ・青年期における食事の重要性、食事摂取基準や食品群別摂取量の目安 ・食料自給率の低下、外食や中食など現代の食生活の問題点 ・目的を明確にした調理実習 ・配膳や食事マナー ・高校生の食事につながる日常食

ウ 衣・住居

	具体的な学習内容	習得させる知識・技術
小学校 (C 快適な衣服と住まい)	<p>(1) 衣服の着用と手入れ ア 衣服の働きと快適な着用の工夫 イ 日常着の手入れとボタン付け及び洗濯</p> <p>(2) 快適な住まい方 ア 住まい方への関心、整理・整頓及び清掃の仕方と工夫 イ 季節の変化に合わせた生活の大切さ、快適な住まいの工夫</p> <p>(3) 生活に役立つ物の製作 ア 形などの工夫と製作計画 イ 手縫いやミシン縫いによる製作・活用 ウ 用具の安全な取扱い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・衣服の働きを理解し、生活の場面に応じた快適な着方・考え方 ・日常の手入れやボタン付け、洗濯 ・身の回りの整理・整頓や清掃の仕方、暑さ・寒さ、通風・換気及び採光 ・形などを工夫し布を用いて物を製作 ・手縫いは、玉結び、玉どめ、実態に応じ、なみ縫い、返し縫い、かがり縫い ・ミシンの使い方(縫い始め、縫い終わり、直線縫い) ・正しい用具の使い方
中学校 (C 衣生活・住生活と自立)	<p>(1) 衣服の選択と手入れ ア 衣服と社会生活とのかかわりを理解し、目的に応じた着用や個性を生かす着用を工夫できること。 イ 衣服の計画的な活用の必要性を理解し、適切な選択ができること。 ウ 衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れができること。</p> <p>(2) 住居の機能と住まい方 ア 家族の住空間について考え、住居の基本的な機能について知ること。 イ 家族の安全を考えた室内環境の整え方を知り、快適な住まい方を工夫できること。</p> <p>(3) 衣生活、住生活などの生活の工夫 ア 布を用いた物の製作を通して、生活を豊かにするために工夫ができること。 イ 衣服または住まいに関心をもち、課題をもって衣生活又は住生活について工夫し、計画を立てて実践できること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・時・場所・場合に応じた衣服の着用、社会生活(所属や職業、行事など)の衣服や着方の決まりを理解し、色や形などの調和や自分らしさを考えた着方の工夫 ・衣服の過不足や処分を考え、計画的に活用 ・衣服の選択、取扱い、組成表示、取扱い絵表示、サイズ表示、縫い方、ボタン付け、既製服のサイズ、リフォーム ・日常着としての着用することが多い綿、毛、ポリエステルの手入れ ・洗剤の働きと衣服の材料に応じた洗剤の種類、電気洗濯機を用いた洗濯の方法と特徴 ・補修は、まつり縫いの裾上げ、ミシン縫いによるほころび直し、スナップ付け ・住居の役割、共同生活の空間と個人生活の空間 ・安全に重点を置いた室内環境の整え方、空調調節、様々な年齢で構成される家族が安全で快適に生活できる環境 ・目的に応じた縫い方や製作方法、ミシンは使用前の点検、使用後の手入れとしまい方、簡単な調整方法、作業環境の整備、アイロンの取扱い方 ・課題を見つけて計画し、実践、評価、改善する問題解決学習、グループで発表や実践発表会などの活動
高等学校 (家庭基礎)	<p>(2) 生活の自立及び消費と環境 イ 被服管理と着装 ア) 被服の機能と着装 イ) 被服の管理と計画 ウ 住居居住環境 ア) 住居と家族の生活 イ) 安全で環境に配慮した住生活</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的慣習への適応などの社会的機能、被服材料の性能や衣服の構成などの被服の機能、着用目的に応じた着装 ・被服材料、被服の構成、サイズの適切な選択、洗剤の働きと汚れが落ちる仕組み、湿式洗濯(ランドリー)と乾式洗濯(ドライクリーニング)の特徴、組成表示、家庭用品品質表示、取扱い絵表示 ・被服計画の必要性 ・生活の場としての住居の条件、家族の生活と各ライフスタイルに応じた住居の条件 ・住居の機能、バリアフリー住宅、地域の住環境、地域コミュニティと共生できる住居の在り方

エ 消費生活と環境

	具体的な学習内容	習得させる知識・技術
小学校 (D)身近な消費生活と環境	(1) 物や金銭の使い方と買い物について ア 物や金銭の大切さについて気付き、計画的な使い方を教える。 イ 身近なものの選び方、買い方を考え、適切に購入できる。 (2) 環境に配慮した生活の工夫について ア 自分の生活と身近な環境とのかかわりに気付き、物の使い方など工夫できる。 イ 食、衣、住との関連を図り、実践的に学習する。	<ul style="list-style-type: none"> ・物や金銭を有効に使う重要性和無駄のない使い方 ・使い終わった物の再利用の工夫 ・リサイクル活動など環境に配慮した地域の取組
中学校 (D)身近な消費生活と環境	(1) 家庭生活と消費 ア 消費者の基本的な権利と責任 イ 販売方法の特徴、物質サービスの選択、購入及び活用 (2) 家庭生活と環境 ア 環境に配慮した消費生活の工夫と実践	<ul style="list-style-type: none"> ・優先順位を考慮した計画的支出 ・商品の購入に伴う選ぶ権利と責任 ・消費生活問題の防止と解決策(消費生活センター、クーリングオフ制度) ・販売方法の特徴と問題点(店舗販売、通信販売、訪問販売) ・商品を購入する際の選択の視点(品質表示、商品マーク)と支払方法(プリペイド型、電子マネー) ・循環型社会を目指した生活の視点(ISO、マネジメントシステム)
高等学校 (A)家庭基礎	エ 消費生活と生涯を見通した経済の計画 (ア) 消費者問題と消費者の権利 (イ) 生涯の経済計画とリスク管理 オ ライフスタイルと環境 (ア) 消費生活と環境との関わり (イ) 環境負荷の少ない生活への取組	<ul style="list-style-type: none"> ・消費者の権利とその実現の在り方、消費者保護に関する施策(契約、消費者信用、多重債務問題など消費者問題が生じる背景と消費者の権利) ・家計とリスク管理(クレジットカード、電子マネー利用の際の慎重な意思決定) ・環境負荷の少ない生活の工夫と企業の取組(ISO、マネジメントシステム)

問題解決学習の位置付け

【中学校】「生活の課題と実践」

家族・家庭や衣食住の学習に関心をもち、生活の課題を主体的に捉え、実践を通してその解決を目指すことにより、生活を工夫し、創造する態度や実践的な態度を育てる。

指導に当たっては、各項目で学習した学習内容を基礎とし、生徒が興味・関心等に応じて家族・家庭や衣食住に関する課題を設定し、主体的に実習や調査などの学習活動を重視し、問題解決的な学習を進めるようにする。実践については、家庭や地域社会との連携を図り、生徒を取り巻く環境に十分配慮し、効果的に行えるよう工夫する。

【高等学校】「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」

自己の家庭生活や地域の生活と関連付けて生活上の課題を設定し、解決方法を考え、計画を立てて実践することを通して、生活を科学的に探究する方法や問題解決の能力を見に付けさせる。

*ホームプロジェクト

- 学習活動は、計画、実行、反省、評価の流れに基づいて行い、実施過程を記録させること。
- 実習後は、反省・評価をして次の課題へとつなげるとともに、成果の発表会を行うこと。

*学校家庭クラブ

- ホームプロジェクトを発展させ、学校生活や地域の生活を充実向上させる意義を十分理解させること。
- 家庭科の授業の一環として、計画、立案、参加させること。
- ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事、「総合的な学習の時間」など学校全体の教育活動と関連を図るようにすること。

3 実践事例 I

科目名	家庭基礎	学年	1 学年
-----	------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名：I 生活を見つめ直す 第2章 食べる 1 どんな風に食べている？
 イ 教科書：「家庭基礎 出会う・かかわる・行動する」 教育図書
 ウ 副教材：「生活学 Navi 2011」 実教出版

(2) 単元（題材）の指導目標

- ・ 食生活を見つめ直し、健康で安全な食生活を営むために必要な栄養、食品、調理及び食品衛生などの基礎的、基本的な知識と技術を習得させ、生涯を見通した食生活を営むことができる。
- ・ 協同学習を通して、コミュニケーション能力及び意思決定能力を高め、課題解決を図る態度を養う。

(3) 評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 技能	エ 知識・理解
単元の 評価 規準	①自分の食生活に関心をもち、主体的に取り組もうとしている。 ②食の安全や衛生について配慮し、主体的に食生活を実践しようとしている。	①食生活指針を基に、食生活の問題点を考え、望ましい食生活を実現する献立を考え、工夫している。 ②食べ物の味について分かりやすい言葉を使ってまとめている。	①食生活に関する適切な情報を収集・整理することができる。 ②調理器具を適切に扱い、基本的な調理の基礎技術を身に付けている。	①食生活を見直し、健康を増進させる方法について理解している。 ②食品衛生について理解し、食生活を充実向上させるための知識を身に付けている。

(4) 単元（題材）の指導計画（16時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準 (評価方法)
2	栄養と食事 ・食中毒に気を付けよう	・食品衛生に関心をもち、安全で衛生的な調理の仕方について理解する。	ア① エ①② [ワークシー] [発表]
2 (本時)	栄養と食事 ・どんな風に食べている？	・食を取り巻く環境を知り、自分の現在の食生活を振り返る。 ・糖度実験を通して、今後の食品の選択について考える。	ア① イ①② エ① [ワークシート] [発表]
6	栄養と食事 ・食べ物と栄養素について学ぶ	・栄養素の働きと食品について理解する。	イ② ウ① [ワークシート]
6	食品と調理 ・献立を考える ・調理実習	・調理及び食品衛生などの基礎的、基本的な知識と技術を習得する。実践を通じて生涯を見通した食生活について考える。	ア①② イ① ウ①② エ②② [ワークシート] [観察]

(5) 本時 (全 16 時間中の 3、4 時間目)

ア 本時の目標

(ア) 自らの食生活を振り返ることで、現代の食生活の傾向と問題点について考えるとともに、毎日の食事が健康と関わっていることを理解する。

(イ) 身近な飲み物から摂取する糖類を測定する。自分の味覚と実際の糖度の違いを知る。清涼飲料水や加工食品の原材料に関する知識を深める。

(ウ) 協同学習を通してコミュニケーションの活性化を図り、意思決定能力及びプレゼンテーション能力を高める。

イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
導入	20分	<ul style="list-style-type: none"> 入室及び実習室の使い方を確認する。 スリッパに履き替え、自分の実習台の確認し、身支度と手洗いをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 昨今の食中毒やインフルエンザの流行などの防止の観点から、基本的事項を再確認させる。 正しい手洗いについて実演し、理解させる。 	ア② エ② [観察]
展開	30分	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート配布 実験の目的及び方法について理解する。 糖度計の正しい使い方と測定の仕方を理解する。 糖度の測定を行う。班長は、糖度計の使い方を班員に伝達する。【協③】 一つのサンプルを班全員で測定する。【協①②④】 ①清涼飲料水の糖度を想定し、糖分の計算を行う。原材料について確認する。 ②糖度の測定結果を黒板に書いて、糖度の違いを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを配布し、協同学習の視点で班員の役割分担を自覚させながら、実験内容を理解させる。 班長を集め、糖度計の使い方を理解させる。 全員が同じサンプルを測定し、結果を共有させる。 ジュース、果汁入り飲料水、コーラ、コーラゼロなど主なものの結果について考察させる。 	ア① イ② ウ①② エ①② [観察] [ワークシート]
	40分	<ul style="list-style-type: none"> ③果物の糖度について予測し、測定する。 ④紅茶を入れ、砂糖を入れて飲む場合の糖分について考える。 実験結果は、ワークシートにまとめ、班で考察する。【協①②③】 班で意見交換をし、測定結果から分かったことをグループの意見としてまとめる。【協④⑤】 班で協力して片付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 本物の果実とジュースとの糖度の違いを比較させ、考察させる。班長にまとめさせる。 温かい紅茶を飲む際の糖度の感じ方の違いを体験させる。 班で測定結果をまとめさせる。 実験結果を考察し、班長がリーダーとなり、グループの意見としてまとめるように指示する。原材料について知っていることを振り返りながら記入させる。 	ア①② イ② ウ① [観察] ア① ウ② エ② [観察]
まとめ	10分	<ul style="list-style-type: none"> 課題「①なぜ糖度が違うのに甘いのか。」「②なぜ甘味料があるのか。」について、考察し、記録用紙をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 次回の授業の予告と課題を提示し、本時の内容を考察させる。 	ア①② エ①② [観察]

*協同学習の要素：【協①】協力する、【協②】互いに関わる、【協③】個人の責任、
【協④】スモールグループでの学習活動、【協⑤】学習活動の充実

(6) 本時の振り返り

ア 協同学習の五つ要素を、授業にどのように取り入れられるかを検証するために、以下の項目について事前に検討した。

(ア) グループの編成

協同学習は複数の人数で行うため、生徒のグループ分けが必要である。グループの編成方法を「グループの形態」、「グループの人数」、「グループ=メンバー」の観点で考えた。

(イ) グループの形態

一学期間や一年間にわたって常に一緒に活動するグループとした。この理由は、今後、食生活分野を学ぶに当たり、同じメンバーでの協同学習を通して、コミュニケーション能力を高め、多様な考えや意見を参考に自ら判断する意思決定能力につなげるためである。

(ウ) グループの人数

協同学習では二人から6人という人数が効果的な人数とされている。本校では一クラスが40人から42人であり、調理台が10台あることから、一グループの構成人員を4人から5人とした。

(エ) グループ=メンバー

協同学習では一般的に、同質のメンバーよりも、異質のメンバーで編成されたグループの方が望ましいとされている。メンバーを決めるには次の3通りの方法がある。①「ランダムな決定方法」、②「生徒による決定方法」、③「教師による決定方法」である。本校では、今までの授業の中で、全ての方法を実践してみたが、それによるクラスの差異を特に感じることはなかった。

そこで、本校では②を用いることにした。この理由は後の調理実習において、生徒が食材を準備する場面があること。金銭面・時間の面でも話し合い、生徒が実行しやすいこと、授業に対する学習意欲の向上につながる。また、どんなグループになっても途中でメンバーに不満をもつ生徒がいるが、生徒同士に意思決定させることは、自分たちの責任でことを進めるという「協力関係」「個人の責任」をしっかりと果たせると考えたからである。懸念される仲間外れの問題も、あらかじめ、グループ決めの約束事として、考えさせてから始め、クラスによって、好きなもの同士、くじ引き、誕生日順、教室での席順などのアイデアが出てくる。グループの成長には時間が必要で、その困難な時期を超えるという経験は最も貴重な学習経験の一つとなる。今回の研究授業のクラスはグループ決めをくじ引きで行うことになり、その偶然を楽しもうという気持ちで授業に臨むように生徒に働きかけた。

イ 本時は食生活を見直そうという食生活指針の一つを考える授業である。生徒は、実験を進める中で、なぜ糖度が違っているのか、なぜ砂糖を使用していなくても甘いのか、なぜ砂糖を使用しないのか、なぜ飲み物の温度によって甘みの感じ方が異なるのか、という疑問から原材料に着目し、甘味料に注目するようになった。糖度実験から、食品を購入する際に、どのような食品を選択するのかを考え、班で実験結果を考察することで、自分の選択肢を増やすことができ、自己の意思決定の能力を高めることができた。

ウ 糖度実験終了後は、甘味料について課題を提示し考えをまとめさせることとした。翌週の糖度実験のまとめとして振り返りの授業を行い、糖度実験のまとめのレポートをあえて1週間後に提出させた。糖度実験の授業終了後にワークシート等を提出させ、生徒の理解度や知識の定着度を確認することはできるが、1週間の時間を設けることで、生徒が自ら考える時間をもち、糖度実験から疑問に思うことを調べたりするなど、授業で学んだことを発展させ、自己の問題解決に向けてじっくりと取り組める時間ができた。

この学習を通して、他者と関わり合いながら学び、コミュニケーションの充実を図り、様々な意見や考え方を共有することで、意思決定する際の判断材料が増え、自分で自己決定しやすくなった。そこで、各班ごとに糖度実験を通して学んだこと、考えたことなどを発表することとした。以下に生徒の発表内容の一部を示す。

***生徒の声**

- 「甘さ」というテーマで調理実習をした。みんなで協力して、そして楽しむと言うことの大切さを学んだ。普段僕たちが飲んでいるジュースで、こんなに変わったことが出来るなんて思ってなかった。仲間たちと楽しめたので本当にいい授業になったと思う。
- 糖度について、非常に関心を高めることが出来た。本当になぜなのか疑問が残っているので家でパソコンや本などで調べ問題を解決したい。
- Aの飲料が1位の予想なのに最下位だった。普段飲んでいるものの原材料で知らないのが多い。普段から飲んでいるもの、食べているものの原材料にもっと興味をもってみようと思った。糖分を何でとるのがよいかを考える。

従来の授業では、教員が事実や正解をすぐに答えとして教えたり導いてしまったりしがちであるが、生徒の発表等から、今回の実験では、自分たちで考えを深め合い、互いに教え合うことで理解を深められたといえる。生徒の感想に、「ためになる授業であった」とあり、大変うれしくやったかいがあったと思っている。

その後の調理実習や発表学習を行ったクラスの生徒の感想を一部紹介する。

- みんなで作業（混ぜたり）を順番に行ったので全員で作った感じがして、すごく楽しかった。効率がよくて一人で作るのとは違うなど思った。
- みんなで協力し、自分たちの意見を話し合うことの大切さを学んだ。一人ではできなかったところも他の人の意見を聞いて気付くことができた。

4. 実践事例Ⅱ

科目名	家庭総合	学年	2 学年
-----	------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名：1編 人とかかわって生きる

3章 子供とかかわって生きる

4 子供の生活を知る・・・子供の生活（子供の遊び）

イ 使用教材：教科書「新家庭総合 ～未来をひらく生き方とパートナーシップ」
実教出版

ウ 副教材：「2011生活学Navi. 資料+成分表」実教出版

(2) 単元（題材）の指導目標

- ・ 基本的な生活習慣の形成、食事や衣服、健康管理と安全などの概要を理解する。
- ・ 遊びを通して心身の発達や健康の保持増進がなされることを理解する。
- ・ 遊びの意義や児童文化財の子供への影響について考える。

(3) 評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 技能	エ 知識・理解
単元の 評価規準	子供の生活に関心を持ち、子供のより良い生活について考えようとする態度を身に付けている。	子供の生活における問題点について課題を見だし、その解決に向けて思考を深め、適切に判断し、工夫している。	①保育に関する適切な情報を収集・整理することができる。 ②子供の生活を充実・向上させるために必要な基礎的・基本的な技術を身に付けている。	①子供と関わって生活することの意義と役割について理解している。 ②子供の生活に関する基礎的・基本的な知識を身に付けている。

(4) 単元（題材）の指導計画（5時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準 (評価方法)
1	「生活習慣の形成と自立」 ・ 基本的な生活習慣と社会的な生活習慣 ・ 子供の生活リズム	・ 子供の生活リズムを知る。 ・ 身に付けるべき生活習慣を理解する。 ・ 自分の生活習慣を振り返る。 ・ 演習を通して子供への注意の仕方を知る。	ア イ ウ①エ① [ワークシート] [発表]
1 (本時)	「子供の生活～子供の遊び～」 ・ 遊びの機能 ・ 協同学習	・ 子供の遊びを考える。 ・ 班で相談して考えをまとめ、遊びの機能を理解する。 ・ 子供の遊びについて、協同学習に参加し、発表する。 ・ 自分の理想の子供像を考え、そのために必要な遊びを見付ける。	ア イ エ①② [ワークシート] [発表]
1	「子供の生活～子供の遊び～」 ・ 遊びの種類 ・ 遊びをめぐる問題	・ 子供の遊びの種類や特徴を知り、児童文化財の役割を理解する。 ・ 遊びをめぐる問題点を考える。 ・ 現代の子供の遊びについての自分の意見をまとめる。	ア イ ウ① エ①② [ワークシート]

1	「子供の生活 ～子供の食生活と衣生活～」 ・乳児の食生活 ・幼児の食生活 ・乳幼児の衣生活	・母乳と調製粉乳の違いや利点と欠点を考える。 ・調製粉乳や離乳食の試食をして、子供の食事に必要な注意点に気付く。 ・子供の心身の特徴から子供の衣服に必要な要素を見付ける。	ア イ ウ①② エ② [ワークシート] [観察]
1	「子供の生活～子供の健康～」 ・子供の病気と健康管理 ・子供の事故	・子供の病気と事故の特徴を知り、対策を考える。 ・演習を通して、子供の健康管理と事故対応について対処法を考える。	ア イ ウ② エ①② [ワークシート] [観察]

(5)本時（全5時間中の2時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 遊びの機能を理解し、必要に応じた遊びを子供に提供できるようになる。
 (イ) 子供にとっての遊びの意義や役割について理解する。
 (ウ) 様々な機能をもつ遊びについて考え、自分の言葉で仲間に発表できるようになる。

イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
導入	5分	・前時の内容を確認する。 ・本時の内容を確認する。	・教科書から、子供の生活は食事・睡眠・遊びで構成されていることを確認させる。 ・グループ分けは、前時に済ませておく。 ・話し合える体制を作らせる。	ア [観察・発言]
展開	35分	・各自で子供の遊びを考える。【協③】 ・班員同士で発表し合い、遊びの種類を増やす。【協①②③④】 〔雪玉転がし〕 ・班で協力して、自分たちの思いついた遊びの中から提示した遊びの機能に当てはまるものをそれぞれ三つずつ考える。 ・なぜその遊びに、その働きがあるか説明できるようにまとめておく。【協①②③④⑤】 ・子供にその遊びをさせる際の注意点を考える。【協①②③④】 ・発表用紙に記入する。【協③】 ・クラス全体に発表する。【協⑤】 1班1機能1分で発表する。 ・各班の発表を聞きながら、感想を記入する。	・自分の経験だけでなく、子供をもつ親として考えてみるよう促す。子供の遊びを一人10個挙げさせる。 ・必ず一人ずつ全員に発表させるために、発表時間を設定する。 ・一つの遊びが一つの機能しかもたないとは限らない事を示唆する。 ・みんなで考え、班で発表できるように相談させる。 ・親や大人として子供と関わる際の視点で考えるように助言する。 ・発表できるように、文章をまとめておくよう声かけをする。 ・短時間で書いて前に貼るように促す。 ・時間厳守で、皆に分かる発表を心がけさせる。 ・真剣に発表を聞かせ、発表内容についての感想を発表させる。	ア イ [観察] イ ウ① [観察] イ エ①② [観察] イ ウ① エ①② [観察] [ワークシート] [発表]
まとめ	10分	・本時の学習内容を振り返る。 ・次回の学習内容を確認する。	・発表の内容を振り返り、自分の育てたい子供像とそのため提供すべき遊びを考えさせる。 ・次回の学習内容を伝える。	エ①② [ワークシート]

*協同学習の要素：【協①】協力する、【協②】互いに関わる、【協③】個人の責任、
【協④】スモールグループでの学習活動、【協⑤】学習活動の充実

(6) 本時の振り返り

ア 今回は、子供の遊びについて学習するための導入として、協同学習の手法を用いた授業を行った。黒板にタイムテーブルを書き出す事によって生徒に時間を意識させ、時間内に授業が完結し、生徒が今日の学びは何であったのかを理解させることができた。また、班作りから生徒たちで行わせ、一人一人に役割を与えたことで、個々の生徒が懸命に自分の役割を果たそうとする姿勢が見られたり、班で話し合いをする内容を多く設けたことで、班のメンバーの意見から新たな考えを得て問題解決につなげることができたり、班で相談し考えをまとめる様子が見られた。その結果、ワークシートの感想からは子供の遊びの意義を理解した内容が多く見られ、親の立場で子供の遊びを捉える視点が多くあった。そして、人前で話し合った内容を、具体的な言葉を用いて他者に分かるように発表することが苦手な生徒の実態から、発表するために具体的な言葉で話し合った結果をまとめるよう下図のようにワークシートを工夫したところ、発表に自信をもって取り組み、発表を通して班の考えを他者に伝える力を身に付けられたことも大きな収穫である。

イ 今回の協同学習では話し合う内容が多くなりすぎ、なかなか話し合いが終わらなかつたり、教員側の適切な声かけが不十分であったために話し合いを活性化したりすることがあまりできなかった。これはタイムテーブル通りに授業を進行し、授業を1時間で完結させることに重きを置いたため話し合う時間が短すぎたためだと言える。また、今までのグループ学習と違い、五つの要素を取り入れた協同学習は初めてであり、生徒が学習形態に慣れていないことも大きく影響していると考えられる。そこで課題として、協同学習の効果を十分に発揮するためには、①協同学習が初めての生徒に対しては、教員側が生徒に今何をすべきなのか、明確な指示を与えること、②生徒の役割分担を明確に示すことがポイントであることが分かった。また、話し合いの時間を確保するためには、協同学習を用いる場面を年間を通じて計画し、繰り返し実践を行い、他者の意見や考えを共有したり、自ら意思決定する場面を設けることで問題解決力をより高めることができると考える。

ウ ワークシートの工夫例

生徒に発表させることを認識させ、何について班で考えまとめればよいのか、ワークシートの()に適する言葉について、具体的な言葉で考えられるように工夫した。生徒は、どのように班として意見をまとめればよいのか言葉の整理がしやすくなり、スムーズに発表でき、発表内容が充実した。

・子供に遊びを提供する大人の気持ちになって、自分たちの発表する遊びの機能について代表者が発表しやすいように次の流れに沿って、原稿を書いてみよう。

()や()や()は()
の機能があると私たちは考えました。なぜなら、
()
だからです。この遊びを子供にさせる時は()
を注意する必要があると思います。

5 実践事例Ⅲ

科目名	家庭総合	学年	2 学年
-----	------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名：くらしの中の「衣」
- イ 教科書：「家庭総合」教育図書
- ウ 副教材：「生活ハンドブック」第一学習社

(2) 単元（題材）の指導目標

- ・ 衣服の機能や着装、材料などの基礎的な知識と技術を習得し、豊かな衣生活を営むことができる。
- ・ 被服の管理について理解を深め、安全と環境に配慮し、主体的に衣生活を営むことができる。
- ・ 消費者として既製服に関する必要な情報を入手して、適切な意思決定に基づいた衣服の購入ができるようにする。

(3) 評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 技能	エ 知識・理解
単元の評価規準	①衣服の機能と着装、人と被服の関わりについて関心をもっている。 ②衣生活を主体的に管理し、快適な衣生活を営む態度を身に付けている。	①衣生活の課題を見だし、思考を深め、適切な意思決定に基づいた衣服の購入を考えている。 ②衣服製作を通して、自己を表現しようと考え工夫している。	①衣生活に関する適切な情報を収集・整理することができる ②衣生活に衣生活を充実、向上させるために、衣服の構成や衣服製作に必要な基礎的な技術を身に付けている。	①衣生活の意義と役割を理解している。 ②衣生活を充実向上させるために、主体的に衣生活を営む基本的な知識と技術を身に付けている。

(4) 単元（題材）の指導計画（14時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準（評価方法）
2	・衣生活を考えよう 衣服の機能、性差、TPO、流行を知る。 ・着装を考える。	・衣服の機能を知る、衣服の性差、TPO、流行を知る。 ・ライフステージ、ライフイベントごとの着装を考える。	ア①② ウ① エ①② [ワークシート]
2 (本時)	・衣服の材料を知ろう 繊維の種類や加工法による性能の違い、衣服の安全について考える。	・衣服材料、繊維の種類や加工法による、性能の違いを知る。 ・繊維の燃焼実験から、繊維の違いによる、衣服着火の危険性を知る。	ア② イ①ウ① エ①② [ワークシート]
6	・衣服を作る 既習技術の確認と習得 衣生活への応用 オリジナル小物の活用	・シャドーステッチを用いたティッシュ BOX ケースの製作を行う。 ・並縫い、まつり縫い、返し縫、アイロンかけ、ボタン付け、スナップ付けなど既習技術を習得する。 ・オリジナル小物を実生活で活用する。	イ② ウ①② エ② [観察] [ワークシート] [作品]
2	・衣服の管理 衣服の選択と手入れ	・選択と手入れ（日常着の管理方法、取扱い絵表示、ドライクリーニングの利用、洗浄実験）について理解する。	ア② ウ② エ①② [ワークシート]
2	・衣服の構成 これからの衣生活と環境	・衣服の構成（平面構成、立体構成）と採寸方法について理解する。 ・これからの衣生活と環境について考える。	ア② イ①② ウ① エ② [ワークシート]

(5) 本時（全14時間中の3, 4時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 日常多く用いられている衣服材料の種類、取り扱い上の特徴について理解させ、着装的にあった衣服材料の選択ができる。
- (イ) 衣服は材料によって、燃え方、燃えやすさ、有害性が異なることを理解する。
- (ウ) 衣服は燃えるものであり、それを身にまとっているという意識をもち、衣服の安全について考え、特に高齢者や乳幼児の衣生活について配慮が必要であることに気付く。

イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準 (評価方法)
導入①	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の復習 ・本時の目的を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・班が全員そろっているか確認する。 ・プリントを準備するよう指示する。 	ア① [ワークシート]
展開①	40分	<ul style="list-style-type: none"> ・衣服は何でできているか考える。 ・布の成り立ちを確認する。 ・繊維の特徴を抜き出し、発表する。 【協①②】 ・繊維の性能を考え、発表する。【協①②】 ・繊維加工技術の向上により様々な性能をもった商品が出回っていることに興味をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの学習を振り返らせる。 ・ルーペの配布、ICTの利用 ・班で協力して資料から、ワークシートの答えを抜き出すよう指示する。 ・様々な加工が施された高機能繊維サンプルを提示する。(プリントで提示) 	ア①② イ①② エ①② [ワークシート] [観察]
まとめ①	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・燃焼実験の役割分担を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次の時間の予告 ・実験の手順、記録の役割を指示する。 ・実験器具を配布する。 ・観察のポイントを提示する。 	
導入②	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の目的を確認する。 「燃焼実験を行い、繊維の燃焼の違いと着火の危険について理解する。」 ・実験の方法、諸注意を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙を燃焼させて、実験に関する諸注意を行い、火傷等の事故が発生しないよう安全に実験ができるよう指示を出す。 (アルコールランプの扱い方、布地への着火の仕方、燃焼中のピンセットの持ち方など) 	
展開②	40分	<ul style="list-style-type: none"> ・綿、毛、ポリエステル、アクリル、ナイロンの5種類の繊維を順番に燃焼させ、燃焼の様子を記録する。 【協①③】 ・各役割ごとに班で発表し、各自の記録表を完成させ、繊維による燃焼の違いを確認する。【協②】 ・班で考察を行う。黒板に記入する。 【協④⑤】 ・着衣着火の例を映像で確認する。 とくに動きの遅い高齢者や、判断力が未熟な幼児がどのような場面で事故に遭うことが多いのか。防止策を班で確認する。 ・黒板に記入する。 ・「考察」と「班で考えよう」を発表する。 【協④】 	<ul style="list-style-type: none"> ・換気に注意し、繊維燃焼中、窓を開け十分空気を入れ替えてから次のサンプルを燃焼させる。 ・5種類の繊維の燃焼終了後、消火させる。 ・5種類の燃焼の違いを確認させる。 ・動画の事前準備をしておく。 ・プリントの裏面資料を見るように指示する。 	ア①② イ①② ウ① エ①② [ワークシート] [観察]

展開②		<ul style="list-style-type: none"> ・他の班は違う意見であれば発表、質問する。【協⑤】 ・防災加工処理済み布は燃焼しにくいことを確認し、加工による安全性の向上を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・動画の事前準備をしておく。 ・プリントの裏面資料を見るように指示する。 ・講評はなるべく短く、まとめて行う。 ・演示で防災加工布を燃焼させる。防災加工が着衣着火の防止に有効であることを理解させる。 	イ①② ウ① エ② [ワークシート] [観察] エ①② [ワークシート]
まとめ②	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・衣服を構成する繊維は原料の違いにより燃え方が異なり、安全面、環境面からも配慮が必要であること理解する。 ・生涯を見通した生活者の視点でも衣服を選ぶことが必要になることを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・燃焼実験の感想と防災加工衣料の購入方法、流通量についての課題を出す。 ・実験器具をプレートに戻させ、片付けさせる。 ・プリントを提出させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・次回の予告 	エ①② [ワークシート] [レポート]

*協同学習の要素：【協①】協力する、【協②】互いに関わる、【協③】個人の責任、
 【協④】スモールグループでの学習活動、【協⑤】学習活動の充実

(実験器具)

アルミ製バット、ピンセット、アルコールランプ それぞれ5セット ライター
 無地実験生地 各3×3cm (綿、毛、ポリエステル、アクリル、ナイロン)、防災加工布 (綿)

(準備)

- ・着衣着火動画 NITE 製品安全協会 <http://www.nite.go.jp/jiko/poster/swf/0411.swf>
- ・役割分担

前時までにグループで学習を進めるため、グループの編成、班での役割を決めておく。
 また、本時に、燃焼の様子を四つの視点で分けて役割分担させ、グループの一員としての役割を複数もたせて、チームで目標を達成するための動機付けを行った。

- ・資料

グループ学習役割分担表、燃焼実験記録用紙、燃焼実験記録メモ、実験振り返りレポート

(6) 本時の振り返り

ア 生徒は、物が燃える様子を見たり、燃やしたりする経験が乏しく、燃え方の違いや臭いのイメージがないため、観察のポイントを示し、また演示で紙を燃やして燃え方を言葉で表現することで燃焼の違いを捉えるよう指導した。

イ 協同学習の五つの要素の一つである互いに協力する関係を築くために、生徒にグルーピングや役割分担をさせたことにより、チームの連帯感が生まれ、生徒の気付きや疑問、教師の質問に対する答えなど、グループのメンバーに支えられていることを実感し発言しやすい環境になった。また、その後の被服製作の授業で、すぐに教師に質問せず、グループ内で教え合う様子が見られた。

ウ 本授業では前2校の授業実践を踏まえて行った。グループ学習に協同学習を取り入れることで、生徒たちは考えを深め、新たな気付きや問いを生むような誘発する授業へと発展

することにより、更に課題解決能力が高まった。

エ 今回の授業では生徒に十分に考える時間を与えるために、生徒個人の感想をレポートにまとめさせた。授業の最後に防災繊維製品についての調査もさせ、授業の振り返りと授業で生じた課題について解決させるようレポート用紙を用意した。授業でのそれぞれの感想や気づき、考えを文章にすることで授業を振り返り、学習内容を定着させ、自分の生活に生かそうとする姿勢が見られた。また、課題に対して、自分で調べ、考えを見いだすことで、生徒の中から、新たな問いが生まれ、学習を発展させることができた。

オ ワークシートの工夫

どのように繊維が燃えたのか燃え方について意見をまとめ、ワークシートに（ ）を設け、できるだけ具体的な言葉を入れるように指示をした。繊維の燃え方から繊維の特徴、購入する衣服の選択や着衣の際に留意する点などを班で考え、人前での発表に慣れていない生徒でも、班でまとめた事柄についてしっかりと説明し、発表することができるよう下図のように工夫した。

*繊維の燃焼実験ワークシート

考察

1 班	燃焼実験の結果、（ ）が分かった。このことにより、（ ）だと考えた。
2 班	燃焼実験の結果、（ ）が分かった。このことにより、（ ）だと考えた。
3 班	燃焼実験の結果、（ ）が分かった。このことにより、（ ）だと考えた。
4 班	燃焼実験の結果、（ ）が分かった。このことにより、（ ）だと考えた。
5 班	燃焼実験の結果、（ ）が分かった。このことにより、（ ）だと考えた。

班で考えよう 着衣着火はどのような場面で起きるのかな？

1 班	着衣着火は、（ ）の（ ）な場面で起こると考えた。 防止策は、（ ）
2 班	着衣着火は、（ ）の（ ）な場面で起こると考えた。 防止策は、（ ）
3 班	着衣着火は、（ ）の（ ）な場面で起こると考えた。 防止策は、（ ）
4 班	着衣着火は、（ ）の（ ）な場面で起こると考えた。 防止策は、（ ）
5 班	着衣着火は、（ ）の（ ）な場面で起こると考えた。 防止策は、（ ）

6 実践事例Ⅳ

科目名	家庭基礎	学年	1 学年
-----	------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名： 住生活をつくる

イ 教科書：「新家庭基礎」未来をつなぐパートナーシップ 実教出版

ウ 副教材： 最新「家庭科トータルデータ ver.2.0」 教育図書

(2) 単元（題材）の指導目標

- ・ 生活の場としての住居の条件、家族の生活と各ライフステージに応じた住居の条件を考える
- ・ 快適な住まい、健康的で安全な住まいの環境について理解する。
- ・ 住環境の役割を理解し、地域社会との関わりと共生できる住居の在り方を考える。

(3) 評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 技能	エ 知識・理解
単元の 評価 規準	①生活の場である住居に関心をもっている。 ②ライフステージに応じた住居など、人間と住居との関わりを理解し、安全で環境に配慮した住生活を考えようとする態度を身に付けている。	①家族の生活の場としての住居の条件を生徒を見通して考え、快適な住生活について適切に判断している。 ②安全に配慮した室内環境や自然災害に対する防災対策について、考えまとめている。	①住生活に関する適切な情報を収集・整理することができる。 ②快適な住まい、健康的で安全な住まいについて考え、計画し、管理できる技能を身に付けている。	住居の機能、住居と地域との関わりなど、基礎的・基本的な知識を身に付けている。

(4) 単元（題材）の指導計画（5時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準 (評価方法)
1	・人と住まいの関わり ・ライフスタイルと住まい	・住まいの機能を考える。 ・住まいの文化を知る。 ・ライフスタイルが変われば住まいが変化していくことを考える。	ア② イ① ウ① エ [ワークシート]
1	・快適な住まいづくり ・健康的で安全な住まい環境 ・安全に配慮した室内環境	・住空間の機能を知る。 ・住空間と家族の関係を考える。 ・快適な住空間を考える。 ・快適な室内環境を知り、健康的で安全な住まいについて考える。 ・家庭内事故と安全対策について考える。	ア① イ①② ウ①② エ [ワークシート] [観察]
2 (本時)	・自然災害（地震）の防災対策	・災害の実態と安全対策について理解する。 ・地震災害の防災対策について考える。 テーマを与え、班ごとに話し合い、発表する。	イ①② ウ①② エ [ワークシート] [観察]
1	・生活環境と地域環境 ・まとめ	・生活環境を知る。 ・地域の環境を考える。 ・住環境の課題を考える。	ア② イ② エ [ワークシート] [発表]

(5) 本時 (全5時間中の3、4時間目)

ア 本時の目標

- (ア) 住まいの安全と災害対策について、基礎的・基本的な知識と技術を習得する。
- (イ) 東日本大震災の経験を基にして、地震災害のときの行動を振り返り、今後に生かす必要がある対策について協同学習の手法を用いて、多くの情報を共有し考える。
- (ウ) グループで話し合いをすることによって、言語能力やコミュニケーション能力を高める。
- (エ) 他教科との連携も視野に入れ、地震災害を理解する。

イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価基準 (評価方法)
導入	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の内容を確認する。 ・本時の内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器を準備する。 ・調理実習のグループであらかじめ、座らせる。 ・前回の課題を確認させる。 ・本時のねらいを確認させ、グループごとに話し合い、発表することを知らせる。 	<p>ア①② [観察]</p>
展開 ①	45分	<ul style="list-style-type: none"> ・前回配布されたワークシートに、課題が記入されているか、確認する。 ・課題1を数人が発表する。 ・課題2を見ながら、意識調査のデータと比較してみる。 ・東日本大震災が起きた時の自分の行動を振り返り、ワークシートに時間の経過に合わせて記入する。 ・本時のテーマ「大規模な地震災害が起きた時、高校生ができること」をグループで話し合い、発表する。 ・グループの役割を決める。 出席番号順 (班長、発表者、記録…話し合いの記録や発表の台本作り、タイム…時間を計る)【協③】 作業1 ・三つの場面を設定する。 この場面で地震が起きた時の行動について話し合いをする。 ・グループごとに場面を選択し、人物の役割も決める。 ・班長代表で場面設定を決める。一つの場面設定につき、3～4グループとする。 ・各グループの考えを発表する。発表のやり方は、紙芝居プレゼンテーションの方式をとる。 作業2 ・役割になった登場人物で、地震が起きた時の行動を付箋に記入する。【協③】 作業3 ・それぞれの登場人物の立場を自分で考えた付箋を基に、グループの人に、説明する。【協①②③④】 (A3ワークシートに付箋を貼る。) 作業4 ・互いの立場を理解した上で、高校生として、地震が起きた時にどの 	<ul style="list-style-type: none"> ・3月に起きた東日本大震災の地震以降、各家庭で取り組んでいることや、話し合いをしたことを具体的に記入しているか確認する。 ・高校生の意識調査をしたデータ見せ、自分達の意識と照らし合わせてみる。 ・具体的に記入させることによって、地震災害の時の対応を思い出し、自分の行動を意識させる。 ・話し合いは、調理実習の班で行わせる。(男女混合4～5名)各グループに、A3ワークシート、マジック(黒)、付箋を配布する。 ・協同学習の基本的構成要素を踏まえ、一人一人に役割を作り、責任をもって話し合いに参加させる。また、多くの情報を共有できるよう、作業を進めさせる。 ・三つの場面 ①スーパーで買い物をしている。 (登場人物：高校生、店員、高齢者、親とその子供) ②電車に乗っている。 (高校生、駅員、松葉杖を使っている大人、高齢者) ③家に一人である。 (高校生、近所の人、小学生、ペットの犬)とする。 ・今後の作業のやり方をワークシートに沿って説明し、発表内容を伝える。(協同学習に入る。) ・できるだけ、多くの意見が出るよう、声かけをする。 ・互いの立場を理解させる。 ・まとめ方は、事前に説明しておく。 ・高校生の立場を考え、紙芝居プレゼン 	<p>ア①② イ①② [ワークシート] [観察] ア①② イ①② [ワークシート] [発表]</p> <p>ア① [ワークシート]</p> <p>ア①② イ② ウ① [観察]</p> <p>ア①② イ①② [観察]</p>

		のような行動をとればよいのか、話し合いをし、まとめる。 【協①④⑤】	テーションで、自分達の意見を伝えさせる。(用紙 A4、10 枚以内)	ア①② イ①② ウ①② 【観察】
展開②	40分	発表 ・各グループのもち時間2分で、紙芝居プレゼンテーションを行う。 ・全体に見えるように、白板に説明をしながら、紙をマグネットで貼っていく。 ・①②の場面について、それぞれの会社から助言を頂いたことを伝え、内容を知る。 作業5 ・本時のテーマを振り返り、まとめをする。	・プレゼンテーションをする生徒に対して、聴く姿勢を気を付けさせる。 ・自分たちが考えた意見と実際に対応する会社の生の声を伝える。また高校生にして欲しいことを伝える。 ・自分の家族をはじめ、高齢者や子供など、地域や社会とのつながりを考え、高校生の立場として、自分に何ができるかを考えさせる。 ・市役所防災課の方の助言を伝える。資料を配布する。 ・生徒の意見から、大切なことは、何かを再確認させる。	エ 【観察】 ア② イ② ウ② エ 【ワークシート】
まとめ	10分	・本時の内容を確認し、自己評価をし、ワークシートを回収する。 ・次週の予告をする。	・学習内容を振り返り、ワークシートに学習の成果や意見、感想を記入させる。	イ② ウ② エ 【ワークシート】

*協同学習の要素：【協①】協力する、【協②】互いに関わる、【協③】個人の責任、
【協④】スモールグループでの学習活動、【協⑤】学習活動の充実

(6) 本時の振り返り

ア 事前課題をきっかけに家族と我が家の防災対策について話し合ったり、グループで話し合ったりすることによって、防災の問題意識が高まり、生徒自身の考えもより深まった。今回、各グループの発表の方法として、紙芝居プレゼンテーションの形式をとった(10枚以内の紙にキーワードの言葉を記入し、グループの意見を伝える方法)。グループ学習の中に協同学習を取り入れ、少人数のグループで役割分担を示して取り組ませたところ、グループ全体の話合いが活性化し、互いの意見や考えをじっくりと聞いて、班としての考えをまとめるようになった。

イ グループ内の役割分担は、機械的に割り振りをした。話し合いを中心とした学習活動に、協同学習の要素を踏まえて生徒に取り組ませたところ、どの生徒達にも均等に仕事を担う機会を与えることとなり、それぞれの生徒が自分のやるべきことを達成し、班員の一人として役割を果たしたことで生徒の自信が高まった。

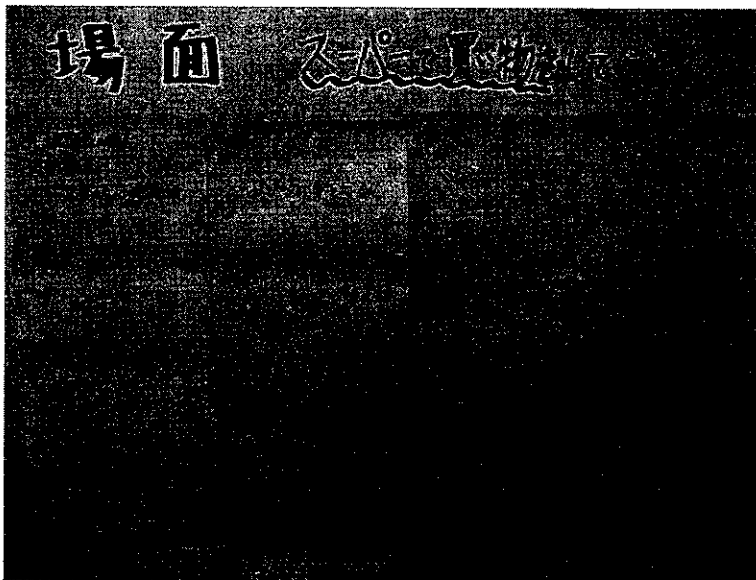
この授業に取り組むにあたり、地域のスーパーや駅、市役所の防災安全課の協力を得ることができ、生の声を生徒に聞かせることができた。授業の展開として、生徒の活動に大変効果的となった。生徒の発表で、共通にでてきたキーワードについては、次の授業で再度振り返り、知識と認識の定着を図った。

ウ 「高校生として、どのような行動をとればよいのか。」を意識できた授業であった。地域からの意見を取り入れることによって、高校生が期待されていることを知ることができた。「守られる側から守る側に。」と生徒の意識の変化がみられ、地域とのつながりが大切であることを理解し、深めることができた。

今回の授業準備をする中で、家庭科の他の領域とのつながりを検討したり、災害について他教科の教員と話をする中で、他教科とも連携できる授業であることを実感した。

昨年3月に起きた東日本大震災は、大きな被害と大きな衝撃を私たちに残した。その後の世の中の動きは様々に変化し、多くのことを考え、行動していかなければならなかった現状がある。防災について、改めて家庭で話し合い、考えた生徒も多いだろう。私たちが暮らしているこの住環境を、安全かつ快適に過ごすための対策として身近に起きた地震災害を例に、防災能力を高めていくとともに家族、地域のつながりの大切さを学習した。

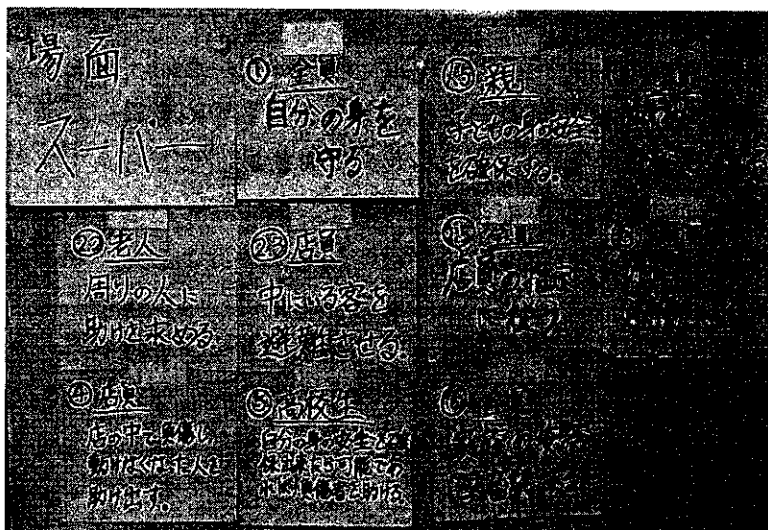
<グループで取り組んだ様子>



例：登場人物、高校生、親子、高齢者、店員

- 目的：お互いにどのように行動するか、理解する。
- 取組方：①場面設定を行う。
②登場人物を分担し、登場人物になりきって、地震が発生した際の行動について付箋に書いていく。

<紙芝居プレゼンテーションの例>



- ・A4用紙10枚以内
- ・プレゼンテーション 時間2分
- *高校生としてとるべき行動を考えながら、場面設定で地震が起きた様子を、みんなで出し合った付箋を基にまとめる。

【協力・資料提供】

- ・小平市役所 防災安全課
- ・西武鉄道 小平駅
- ・消費者環境教育研究会
- ・小平市内のスーパー

VI 研究の成果

今年度の研究では、主体的に行動し課題解決能力を高めるための「思考力・判断力・表現力」を育成し、言語活動の充実を図るために、協同学習の手法を用いて授業展開を行った。

前年度の研究では、授業の中で発表学習や体験学習を意図的に組み合わせることによって、言語活動が活発になり、他者と協力して関わる関係を深め、考察する力や探究する力が高められたとしている。本年度は、発表学習や体験学習に協同学習の手法を用いることで、生徒一人一人の責任と役割、チームでの連携、スモールグループでの活発な発言から、気づき（課題）を声に出して他者と共有し、解決に向けての方策を考え、自らの実生活においても学習したことを活用することで、意思決定能力や課題解決能力を高めることができた。日常的に行っているグループ学習に比べ、生徒自身が、自らやるべき役割を自覚し取り組むことで、グループ内の意見交換も個々の生徒の発言を生かすこととなった。また、話し合った内容や実験等の考察をどのようにまとめたら分かりやすい発表ができるのか、ワークシートの記入の仕方について工夫して、スムーズに発表学習を行うことができた。また、検証授業の生徒の様子から、協同学習を取り入れる際には、①教員側が明確な指示を与えること、②生徒が考える時間を確保すること、③生徒の役割分担を明確に示すこと、④生徒が発問しやすい授業や生徒の発問を生かした授業、生徒自らが問いを創り出す授業を心がけることが有効であることが分かった。

今回の研究では、協同学習を通して学習内容の理解を深めていく中で、仲間とともに学ぶ楽しさを味わうとともに互いの学びを高めあう効果があることが分かった。学習の主役は生徒であり、自己の学習活動が十分にできることで自分の考えを他者に伝えようとし、発表学習が充実するなどの効果につながることも分かった。

VII 今後の課題

学習内容を、科学的・総合的に生徒に理解させるためには幅広い教材研究が必須となるが、教材研究を通して授業に臨む気持ちが高まりすぎた場合、生徒の答えを待てずに教員の知識を先に提示しがちである。協同学習は生徒が自ら主体的に考えるために、教員側もこらえて生徒の答えを「待つ」ことが求められる。時として授業を進める中で時間がかかることもあるため、年間指導計画の中で協同学習を位置付け、様々な分野において適切に活用することも必要である。

今後、教科における言語活動の充実を図るとともに、思考力・判断力・表現力を高めるためには、体験から感じ取ったことを表現させるなど、生徒の考えや声を生かした授業を展開していく。また、家庭科の学習内容を生かして、他教科との教科指導における連携を図ることも必要なことであり、生徒が学習した内容を知識や技術として定着させるためにも、他教科との連携は有効であると考えられる。家庭科での学習を他教科の視点での学びと合わせることで、様々な視点から学習内容を理解することとなる。このことは、ホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動の実施において、生徒が自己の生活や学校、地域社会における問題点や課題を発見する際に十分役立つことになる。

授業時数が限られている家庭科においては、小・中学校での学習内容を踏まえ、高校の家庭科で確実に学習しなければならない内容をしっかりと捉えて指導していく。

平成23年度 教育研究員名簿

高等学校・家庭

学校名	課程	職名	氏名
都立新宿高等学校	全日制	主任教諭	○本橋 洋子
都立赤羽商業高等学校	全日制	教諭	今井 路子
都立豊島高等学校	全日制	主任教諭	福富 睦子
都立小平高等学校	全日制	主任教諭	成田 晴美

○ 世話人

[担当] 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 金澤 正美

平成 23 年度
教育研究員研究報告書

高等学校 家庭

東京都教育委員会印刷物登録

平成 23 年度第 181 号

平成 24 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課

所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号

電話番号 (03) 5320-6836

印刷会社 有限会社 シーダー企画